

# カナダで満洲馬賊小説を読むということ

——初期『大陸日報』と文学——

日高佳紀

一九〇七（明治四〇）年六月二二日にカナダ・バンクーバー市で創刊され、日本の対米開戦直前の一九四一（昭和十六）年十二月六日まで、三〇年余りにわたって発行された『大陸日報』は、戦前期カナダの日系移民コミュニティで刊行されていた日刊新聞のうち、最も広く読まれ、かつ、唯一そのほぼ全容が現存するエスニック紙である。<sup>①</sup>

後述するように、『大陸日報』が創刊されたのは、北米における日系移民排斥運動（以下、排日運動）とそれに伴う移民制限が本格化し始めた時期にあたる。この過程において、移民たちは、ホスト社会への定住・同化の是非をめぐる葛藤を繰り広げることになるのである。この様相については、日系移民史研究において既に様々な成果が得られており、『大陸日報』をはじめとする日系エスニック紙の果たした役割についても詳らかになっている。<sup>②③</sup>

こうした歴史・社会学的研究に対し、本稿の目的は、初期の『大陸日報』に残された言説の中から（文学）的な言説を取り上げること

で、史料に顕れた言説の有り様を明らかにするのみならず、書き手と読み手が相互乗り入れる（場）の様態を捉えることにある。言説の読み手であった一般の労働移民たちは、いかにして、それらの言説と関わり、あるいはそこから逸脱していったのだろうか。むしろ、こうした考察は、新聞記事や法令などを対象とした分析によってもある程度は可能であろう。しかし、指導的な立場で言説を発した者とそれを受容する者の両者の位置を同時に問題化し、その間の落差を捉えるためには、ある過剰さを伴ったテクストを検討の俎上に乗せるべきだと考えたのである。（文学）テクストにおける表現構造と、それが引き起こす読みのダイナミズムに着目する時、史料に書かれた内容のみに注目するだけでは窺い知れない、新たな地平を開示できるはずなのだ。

そこで、具体的な検討対象として取り上げるのが、一九一〇（明治四三）年四月一四日〜六月二九日に『大陸日報』に連載された、『志士活躍 馬賊王』（以下、「馬賊王」という長編小説である。

この作品は、発表とほぼ同時期の満洲を舞台とした小説である。カナダの日系エスニック紙に満洲馬賊を扱った小説を連載することで目論まれていたことは、いったい何だったのだろうか。カナダで

満洲馬賊小説を発表すること、そしてそれが読まれることの意味を問うことは、排日運動下のカナダと、日露戦後に巨大な権益を得た日本が乗り込んでいった満洲との、言説の上での邂逅を扱うことになる。読者たる移民たちにとって、満洲を舞台とした物語のコンテクストとして自らを取り巻く状況が機能するのみならず、物語に含まれた要素——内容およびレトリック——によって状況を読みかえる可能性まで拓かれることになるだろう。満洲と日本の関わりをカナダに持ち込むことで目論まれた要素と、その言説が読み手の側で一人歩きする可能性の両面を検討しながら、初期『大陸日報』における〈文学〉の位相を明らかにしてみたい。

## 1 排日運動と日系ジャーナリズムの成立

まず最初に、『大陸日報』創刊前後の時期を中心とした、カナダにおける日系ジャーナリズムの成立過程を概観しておきたい。

冒頭で述べたように、一九一〇（明治四三）年前後のカナダでは、排日運動の高まりと、日系コミュニティにおけるジャーナリズムの成立が同時に展開されていた。これら二つの出来事の間には、見過ごすことの出来ない関係性を認めることができる。そして、それが『大陸日報』というエスニック紙の性格を規定する大きな要素となっているのである。

カナダにおける排日運動は、一九〇〇（明治三三）年以降、カナダへの移民希望者に欧米語の試験を課そうとする「ナショナル法」が、

西海岸のBC（ブリティッシュ・コロンビア）州議会で数度にわたって可決された（英連邦議会で否決されたため施行には至らず）ことに象徴される。言うまでもなく、マイノリティとしてのアジア移民を白人社会から閉め出すことが、この法律の狙いであった。このような排日の情勢は、日本政府によるカナダへの移民自粛という事態を引き起こすことになる。

こうした状況に対し、在加日系人社会では、一八九六（明治二九）年に設立されていた日本メソジスト教会を中心に、一世移民に対して英語教育を施すことで対処しようとする動きが起る。すなわち「日系人は英語を学び、白人の風習を採り入れ、キリスト教に回心すべし」というのである。この論を推していくと、日系人の子弟はカナダ人として教育させよという結論になる。日系人の場合、一般にキリスト教徒には文化的同化志向のものが多かった。<sup>6</sup>やがて、この英語学校を起点に発行されていた『晚香坡週報』（一八九七年創刊）を引き継いで、活版刷りの最初の邦字新聞として『加奈太新報』が<sup>7</sup>刊されることになるのである。

一方、当時バンクーバー周辺にはおよそ四五〇〇人余りの日系移民が居たとされているが、中でも指導者的な役割を果たしていた有力者たちは、キリスト教会に同化志向に反発し、仏教会を設立しようとする気運を高めていく。そして、一九〇五（明治三八）年に加奈陀仏教会が創立され、さらに翌一九〇六（明治三九）年には、日本国内と同様の子弟教育を施す目的で晚香坡共立国民学校が<sup>8</sup>開校されるに至るのである。この動きが、『加奈太新報』に対抗するかたち

での『大陸日報』の発刊に繋がっていくのだ。

そして、『大陸日報』が創刊された一九〇七（明治四〇）年を迎える。この年は、カナダにおける日系移民社会において、その歴史的切断を考える上で重要な年にあたるのである。

一八九八（明治三一）年にハワイを併合したアメリカ合衆国（以下、アメリカ）政府は、カリフォルニア州における排日運動の高まりから、一九〇七（明治四〇）年二月に日本人移民のハワイからアメリカ本土への移住渡航を禁止した。直接アメリカ本土の港に行くルートが禁じられたことで、ハワイからの移民は、大挙してカナダ西海岸のバンクーバーを目指すという事態になる。実際、この年の四月以降の半年間で、二五〇〇人余りの日本人が、ハワイから押し寄せることになった。特に、七月にハワイから一度に一一八九名もの日本人を乗せて入港したクレーリック号は、BC州の人々の排日感情を刺激したとされている。もちろん、このうちのすべてがカナダに留まったわけではなく、多くはカナダ経由でアメリカ西海岸の各都市へ移動したのであるが、それでもバンクーバー周辺の日系移民の人口は、前年までのおよそ六〇〇〇人から一気に一五〇〇人も増加する事態となったのである。

こうした日系移民の急激な増加は、バンクーバーの白人社会にとつて非常な脅威となった。その結果、この年に設立された「アジア人排斥同盟」バンクーバー支部の決起集会に集まった群衆が暴徒と化して日本人街を襲うという、いわゆる「バンクーバー暴動」が勃発するのである（九月七日）。この事件とその後の補償問題が起点と

なって、カナダ政府から外交官レミューが日本に派遣され、両国の間で、いわゆる「レミュー協定」が結ばれることになった。この協定によって、日本からカナダへの移民数が年間四〇〇名に制限されることになるのである。

順調に増加していた日系移民人口は、以後頭打ちとなる。<sup>⑩</sup>また、初めのうち家族の呼び寄せは制限外であったため、移民人口における女性の割合が増加し、移民たちの定住志向が強まっていく契機にもなったのである。

以上のように、排日運動が激化し、日系移民社会が大きな転換期を迎えた時期に『大陸日報』は創刊され、先行していた『加奈太新報』としのぎを削るような形で日系ジャーナリズムを形成していったのである。先に述べたように、両紙の間には、白人カナダ社会に対する、同化と反同化（＝日本への回帰志向）、といったイデオロギー対立を含みこんでいた。カナダと日本の切斷と、移民の定住志向の高まりが連動して起きる中、もともと反同化志向であった『大陸日報』は、日本人としてのナショナルリズムの維持、あるいは、創出といった傾向を強めていくことになる。また、この点は、当時の日系移民社会の有力者たちによって一九〇九（明治四二）年に結成された「日本人会」の中心的な思想とも連動していたのである。

## 2 初期『大陸日報』と上田黒潮

さて、ここまでみてきたように、『大陸日報』創刊は、移民地にお

ける同化志向と、その過剰な反動としての外地ナショナリズムとも言うべき意識を高揚させようとする動きとのせめぎ合いの裡にあった。ここで展開されていた〈文学〉とは、どのような質のものだったのだろうか。初期『大陸日報』の〈文学〉を検討するにあたり、創刊当初からほぼ途切れることなく連載を続けていた娯楽読み物としての「講談」を省き、それとは別枠を設けて掲載されていた読み物に限定して、以下でみていきたい。なお、その中には「雑報」という項目で掲載されていたルポルタージュなども含まれている。

創刊当初の半年分は失われていて確認できないが、現存する『大陸日報』の最初期のものをみていくと、時折掲載された〈文学〉作品は、自然主義的な文芸物やそれに近い翻訳物が中心であり、そのすべては短編であった。また、この時期の日本の文壇状況についての情報も断続的に掲載されていた。ところが、創刊二年目ぐらいいに入ったあたりから、おそらくは、『大陸日報』の社主が交替したことも関係していると思われるが、それまで模索しながら続けていた創作文芸物が後退し、記者による実地の取材に基づいたルポルタージュが中心となる。

その中で白眉といつてよいのが、長田正平<sup>12)</sup>が書いた「魔窟探検記」という読み物である。内容は、カナダの日本人娼婦と娼館の経営者を実名で取り上げてその素性を暴くといった、いわゆる「筆誅もの」で、その紙面は、『萬朝報』とよく似た体裁を採っていた。バンクーバー市内や周辺のみならずBC州の非常に広い範囲で、しかも相当に深入りしたレベルでの取材が行われている点が特徴的である。一

九〇八（明治四一）年一月から翌年二月まで連載が続き、一旦終わってからもさらに続篇が連載され、後に『加奈陀の魔窟』と題して単行本にもなった。<sup>13)</sup>この読み物は、ルポルタージュとしての面白さもないわけではないが、実際は、この時期の『大陸日報』社会面の中心記事であった、色恋沙汰や駆け落ち話といったゴシップの延長線上で読まれたものと考えてよいだろう。

他にも、いくつかのルポルタージュや、北米やメキシコで成功を収めた移民の紹介記事などがシリーズ化して掲載されるようになる。すなわち、読み物の素材が、移民社会と地続きのところで選ばれるようになっていったのである。

こうした状況はその後、『大陸日報』紙面で長く続くのであるが、その中であつて特異な位置を占めているのが、本稿で具体的に検討対象とする「馬賊王」なのである。この長編小説の作者である上田黒潮（本名・務）は、一九一〇（明治四三）年三月に、創刊当初からの主筆であつた靈鞍芳外の後任として二年間にわたつて『大陸日報』主筆を務めた人物である。カナダ渡航以前の経歴については不明の点が多いのだが、後にまとめられた以下の記述を引用してその人物像を確認しておこう。

#### 上田務君

号して「黒潮」と云ふ、福岡修猷館の出身なり。嘗て東京に於て電気工業を専攻し、福岡中学に教鞭を執れることあり。後鎮西協会事務員として台湾に渡り、明治二十八年転じて廈門に遊

び、更に南清地方を遊歴す。天眼鈴木力氏と相知るや、九州日の出新聞に入りて外交記者となり、同三十五年上京して、黒龍会機関雑誌『黒龍』の編輯を担当し、次いで佐世保軍港新聞を起す。其後朝鮮日報、中国民報、二六新報、満洲日々、安東タイムス等に執筆して、到る所に文名を轟かし、同四十二年加奈陀に渡り大陸日報に入る。君は天資卓犖學識深く、殊に英文和訳に長ず。生平酒を嗜み耳熱し類潮するに至れば即ち風発の談論尽くる所を知らず。在晩二年の後、同社を退きて米國に入り、シヤトル、ポートランドを経て桑港に赴き、同地桑港新聞に筆を執ること一年有余、感ずる所ありて内地に帰り、再び満洲に渡り、現に朝鮮に在りと伝ふ。福岡県門司市門司町の人なり。

（中山初四郎「帰国せる先輩有志の事歴」『加奈陀同胞発展大鑑』附録 一九一九）

後半の傍線部に「酒を嗜み耳熱し類潮するに至れば即ち風発の談論尽くる所を知らず」などとおるように、その前に示された履歴と相俟つて、いわゆる「大陸浪人」ふうの豪快な人物を想像することができる。ここで注目すべき点は、早い段階で、満洲や朝鮮を舞台に国粹主義的な活動を展開していた黒龍会の機関誌の編集担当を務めていたことである。ここにジャーナリストとしての黒潮の思想的背景を認めることができる。北米からの帰国後も満洲や朝鮮を舞台とした言論活動を展開し、一九二五（大正一四）年に亡くなるまで、黒龍会のリーダーであつた内田良平（一八七四〜一九三

七）と親密な交際をしていたようである。<sup>15</sup>

黒潮は、『大陸日報』に主筆として着任した直後から、一二回にわたつて「黒潮日記」と題した旅行記を連載<sup>16</sup>している。ここには、日本を離れる前後からバンクーバーに到着後まもなくまでの間に体験した出来事が綴られている。黒潮の『大陸日報』入社の際には不明の点が多いが、『黒潮日記』を読んでいくと、カナダ渡航および『大陸日報』入社に際しての位置づけを推測することができるのである。

「黒潮日記」は、カナダ渡航が決まり九州の実家に帰省するところから始まる。やがて横浜に戻つてカナダ行きの客船に乗ろうとした黒潮が、荷物の検疫を受けることを要請されたために出立を遅らせざるを得なかつたというエピソードが記されている。<sup>17</sup>当初二月一六日の客船に乗船する予定であつたが、二等船客だつた黒潮は、三等船客と同様の検疫を受けるものと思つておらず、消毒すべき荷物を東京に置いてきたため、翌日の出航に間に合わないという事態になつたのである。

予は二等船客に対してさへ此の如く面倒なる手数を要するに驚きぬ然も人の語るを聞くに三等船客にして其渡航の資格不完全なる為め特に二等客と三等客とは其筋に於いて同一視するの必要あるに至れりと云ふ。左らば此面倒も客より求めたる所にして其罪我に在りと云ふ可きか、予は兎に角非移民的渡航者即ち二等船客に最も多かる可き中等社会の爲めに之を喜ばざるものなり。

やや苛立ちを以て記されたこの挿話には、カナダ渡航後の日系コミュニティにおける黒潮の位置が如実に顯れている。傍線部にあるように、黒潮は自らを「非移民的渡航者」としているのだ。ここには、当時の渡航者をめぐる移民―非移民という階層関係の存在を認めることができよう。たしかに、当時の別資料にも、農業や漁業、林業等に従事することを目的とした労働移民に対して、新聞記者などを「一時滞在者」として区別していた記述を見出すことができるが、ここでは検疫の必要性の有無といったあらゆる階層差によって、自らを「中等社会」に位置づけようとする意識を窺うことができるのである。むしろそれは、単なる職業上の差異と言うべきものではなく、黒潮自身の裡に、言論を行使しうる存在として在加日系人に対する指導的な役割を担う自覚があったものとみてよい。

このような黒潮の意識を裏打ちするのが、日本を発つ前に幾人かの有力者と面会していることである。その中には、当時のカナダ日系社会の有力者だった田村新吉をはじめ、前述した内田良平、さらに、『大陸日報』の前任主筆であった豊鞍芳外らが含まれている。これらの人脈とこの時期の『大陸日報』をめぐる状況を考え合わせると、日露戦争後の日本国内におけるナショナルリズムが高揚していくような状況を、カナダ日系社会でも創り出すことが期待されていたことは想像に難くない。

「黒潮日記」には、特に、田村新吉との「快談」が、日本からカナダに至る航路の途中での回想というかたちで、「垂水別荘の一夜」と題した別枠で掲載されている。ここで両者は「当時米国の提議に係

りて世間の話題となり居たりし彼の満洲中立問題」をめぐつて、満洲経営におけるアメリカの介入についての意見交換を行い、「米国の東洋政策が其鋒銳の一端を現はしたるもの」との共通認識を得る。その上で、日米戦争の可能性についても議論する。

氏は日米戦争に対する予の卑見を徴せられたれば、予は日本にても米國にても今日武力の戦争を為すは愚の極にして現在の所にては到底戦争などとは思ひも寄らず、故に其勝敗如何を付度するが如きも又無用の事に属す要は東洋に於ける商戦に在り、日本人たる者其覚悟を以て緊揮一番せざる可らずと答へたり。田村氏曰く、米國人は実にコスモポリタンにして真に戦意あるに非ず、日本も又利害を考へなば戦争など為し得可きに非ず、要するに君の言の如く商戦を力む可きも是れとても協同和衷して相互の福利を増進する事こそ今の日急務なれ

黒潮は、この田村の見解を「流石に渡米実業団に加はりし人」と持ち上げ、さらには「晚香坡に於ける同胞人士の氣質習慣等を説く事縷々未知蒙昧の予をして一條の光明を認めしむる」といった感謝の言葉を以て締めくくっている。ここには、満洲と日本、そして北米を一繋がりのものでして捉えようとする姿勢が両者の間で共有されていることが示されているのである。

こうした満洲をめぐる国際情勢が、「黒潮日記」に引き続いて連載される「馬賊王」のコンテクストとして機能することは言うまでもないであろう。とりわけ『大陸日報』の読者を想定した場合、日系

社会の有力者である田村新吉との会話を紙面に再現していることは重視すべきである。この記事を書くことで黒潮は、田村と同等の立場で満洲及びアメリカに對峙する位置を、『大陸日報』読者に対して獲得し得たはずなのである。

### 3 「志士活躍 馬賊王」の（日本）

冒頭でも述べたように、『大陸日報』の主筆に着任して間もない上田黒潮が発表した「馬賊王」は、作品連載とほぼ同時期の満洲を舞台とした長編小説である。

「一〇年ほど前」に中国に渡ったまま行方不明となった大淵という男が、中国人に姿を変え、馬賊団の頭目馬賊王になっているという情報日本にもたらされるところから物語が始まる。タイトルとその設定からすると、このトリックスターの主人公を中心とした冒險活劇が期待されるところであるが、内容はまったく異なったものである。馬賊王・大淵が初めて物語に登場するのは連載全六七回のうちの後半第三四回であり、その後も物語の中心的な人物とは言いがたい存在なのだ。また、満洲統一の目論見が明かされ、ロシア人と繋がりを持つ北満馬賊との闘争を描いた活劇場面に至っては、結末の数回ほどで展開されているにすぎない。

むしろ、この物語は、大淵の妻である光子を中心に展開しているのである。夫の帰国を十年間待ち続けた光子は、馬賊王が大淵その人であるという噂を聞きつけて単身満洲に渡り、身につけた柔術を

駆使して悪漢と大立ち回りをする。さらに、光子を連れ戻そうとする大淵の元同志川瀬、あるいは、大淵の武器密輸に荷担する青年谷川、といった作中人物たちが、それぞれ満洲に渡る。彼らが満洲で遭遇した様々な出来事が、「馬賊王」のほとんどの場面を構成しているのだ。そして、様々な偶然の積み重ねによって、最終的には皆、馬賊団に加わることになるのである。最終場面も、窮地に陥った大淵が、光子らの計略によって救出されるところで幕を閉じる。

このように、「馬賊王」は、それぞれ別の目的で満洲に赴いた作中人物たちが、馬賊になるまでを描いたものである。

もともと馬賊になるつもりはなかった光子と川瀬に対し、川瀬の依頼によつて武器密輸の代役を務めることになる谷川のみが、当初から馬賊になることを志望していた。谷川は出立前に川瀬のもとを訪れるが、そこでの對話には、この物語における（馬賊）の位置が明示されている。

『第一君は満洲に行て何をする、』

『此総髪を弁髪に作り直して馬賊になるのです、』

『ウム、馬賊と云へば君、山賊強盗だよ』

『イヤ、川瀬様、君の様な支那通の新聞記者でもまだそんな事を云つてゐますか、馬賊とは満洲住民の総称です、満洲マイナス馬賊はイクオール豆粕です、満洲の産物は馬賊と大豆です、兵賊不分と云つて兵隊と馬賊の間に何等の差異がありません、元來馬賊なる言葉は最近の用語で一般には胡子と呼ぶので、是に

川瀬の間に對する谷川の説明は、滿洲が移民の地であり、それを表すことの中心に「馬賊」を据えようとするものである。先に述べたように、このような會話を交わしていた谷川・川瀬の両者と、大淵の妻である光子が、最終的にはそろつて馬賊になつてしまふ。谷川がいうところの「移民」になつていくのだ。すなわち、日本から滿洲への（移動）そのものによる、作中人物の位置と意味の變化こそが、この物語の主題と言つてよい。

このような物語が、カナダの日系移民たちを読者とした『大陸日報』という新聞で連載されていることの意味を考えるために、まず、文体や紙面構成における特質を確認しておきたい。

このテキストは、典型的な政治小説の文体をとっている。そしてそれは、「志士活躍」という角書にも示されているように、明治維新や自由民権運動の生き残りのような男を中心として、それを取り巻く者たちもまたその活動に組み込まれていく、といった内容と連動している。

紙面構成の上では、他の記事とは一線を画すかのような装飾を施したタイトル表示のもと、六七回の連載のうちのおよそ三分の一に

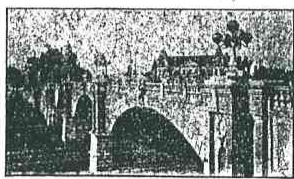
報 日 陸 大 日 五 六 廿 月 四 年 三 十 四 治 明 ( 5 )

馬賊王

第十一回 黑 潮

ぬ、夫より女中の案内する臨川屋、呂より夕飯と順々濟して、夫より止宿帳を認めるにあつるに、下欄にてせし通り田中いねど云ふ偽名を用ひて其事を記録したるが、心の奥中には明日より如何にせば其目的の達する方向に進むを得可きかを

故郷の事ゝ氣に懸らざるも、其の故郷の事、戸籍、川端など六間を、  
東京の如く渡程に世に下るな、  
「當り」の背きて出發するに、  
如何の感情を寄つらん、我輩よ、  
見ざるゝ其に直に、故郷の事、  
「故郷」に歸る來るゝと聞か  
な、其の淵に渡れりとは誰と、  
像可し、然れど故郷の人の態  
其の像に托せられしもの方  
として、其像に打掃くゝは、  
「我身」を支那人の中に、  
「我身」に保連の顔を出し、  
の玉と我身は、直に、此處、



大連日本橋

は實に一瞬間、光子の胸に注

[illegible]

あたる二二回分に、「満洲画報」と題した写真が断続的に掲載されている。それらは、必ずしも物語の内容と連動する場所のものに限らず、満洲の風景や風俗を様々に撮影したものである。「満洲画報」は、物語のヴィジュアル化というよりも、満洲に対する読者の認識を補完する役割を担っているのだ<sup>②</sup>。また、「馬賊王」は、「魔窟探検記」をはじめとするルポルタージュや「黒潮日記」と同じく、『大陸日報』全六面（当時）のうちの第五面上段という掲載位置が割り当てられている。それらの読み物との連続性からも、単なる虚構というよりも、北米から満洲を眼差すような視線のもと、ジャーナリズムとしての付加価値がこの作品に与えられていたことは明らかであろう。

このような構成の中に、先に述べたような、「移動」という行為それ自体が、移動する者の位置や価値を変質させていくといった、移民たちのアイデンティティに直接関わるような内容の物語が展開されていたのである。『大陸日報』読者にとつては、物語の内容レベルでは満洲という異質な空間を舞台としていても、日本からの（移動）という同一の地平で物語を享受する回路が準備されていたと考えられるのである。

こうした「馬賊王」の読者戦略は、連載開始の前日（一九一〇・四・一三）に掲載された序文の記述と考え併せることで、より明確化し得るものである。やや長文だが、以下にその前半部分を引用しておこう。

日清日露の両戦役を経て東洋に於ける我邦の勢威は愈々重きを加へたるも戦後の満洲経営は其声の高きに似ずして其実舉る事遅く、清国朝野は我を嫉視する事甚だしく加之北滿境上に於ける露人は捲土重来の機を俟ちつゝあるを以て満洲の天地は何時修羅の巷と化するやも知る可らず、況んや頃者我移民排斥の成功せる某国は満洲に於ける我優越の地位を猜み陰に清国を助けて事端を醸さんとするの傾向あり、此間に処する吾人同胞の急務は国富の充実を計りて一朝の変に備ふ可きは勿論、將に消滅せんとする我邦固有の士気を鼓舞して之に当るの素地を作らざる可らず、回顧すれば、彼の二大戦役に際し所謂志士浪人の我軍事行動に貢献せる所頗る多く為に非命の死を遂げたる者枚挙に遑あらず、此等の美風は尚之を現代青年の頭脳に注入して彼の輕佻浮薄の弊を剷除するの利剣たらしめざる可らず『馬賊王』一篇の趣向は満洲馬賊の真相を伝へ真の満洲問題の解決は這般馬賊の処分如何にあるを論じ茲に一大強力の馬賊団を作り毒を以て毒を制するに擬し我志士浪人の氣質を此間に發揮せしめんとす、是れ聊か国難に殉せる先輩諸士の靈を慰むると共に更に幾多後進の士を奮起せしめんとするもの若し夫れ架空の趣向の走る所『馬賊王』が如何に将来の東洋問題に重要な働きを為して我國民の大陸の發展を助くるかを述べんとするが如きは是れ一篇の英雄伝的稗史なるも実は一種の政治的見地より出でたる満洲処分論と見る可きものなり。

（「馬賊王」自序）

ここに示された言説を、膨張し始めた日本の急進的な国家主義・帝国主義の顕れとして捉えるのは、無論誤りではない。しかし、あくまでもこの言説が『大陸日報』というエスニック紙に掲載された物語の序文として配置されたものであることを念頭に置かなくてはならない。

すなわち、前半の傍線部に「移民排斥の成功する某国」とあるように、満洲におけるアメリカの位置を示す言説が、アメリカやカナダの日系移民の視点から捉えられているのだ。その一方で、「某国」に対決する姿勢は、後半の傍線部にあるような日清日露の両対外戦争における「志士浪人」の「貢獻」および「美風」に対する顕彰をふまえつつ展開され、さらに、その「志士浪人」の意識が満洲における〈馬賊〉の存在に集約されて示されているのである。そして、最終的には、末尾の傍線部にあるような「我国民の大陸的発展」という表現によって、満洲と北米を「大陸」という共通項によって接続する視点までが導入されているのだ。

このようなレトリックによって表されるナショナリズムは、たとえば日本政府そのものと同格の狭義の日本という国家を必ずしも志向するものではない。むしろ、「馬賊王」の物語で繰り返される「志士」「壮士」をめぐる言説は、この時期の日本国内において急速に失われつつあった「志士意識」を、大陸移民であるところの自分たちが持つべきだとする主張そのものであり、それが移民排斥下のカナダにおけるナショナリズムの創出に接続されようとしていると考えなければならない。逆に言えば、「志士」たる移民にとって、その活動

を許さなくなった日本国内を、むしろ非連続のものとして見なすような意識にも繋がっていくのである。

「馬賊王」本文には満洲から日本国内に直接向けられた言説はほとんど見られないが、日本から満洲に移動する者たちの位置の転換によって、この物語に特徴的なナショナリズムの様態が示されていると考えることができる。物語の前半における、大淵からの協力要請に対する川瀬の反応から見てみよう。

川瀬は銃器を某地点迄送り一度び帰京しぬ、戸橋は川瀬が爾かく躊躇するを俯甲斐無しと罵れども自ら此任に当る程の決心を有せず

『どうも困つたなあ、僕は無論君が自分で上乗りして行くだろうと思つて居たのだが、君が行けないとすりや一つ考へ無けりやならんて。』

『僕も随分考へたが、十年前の僕なら兎に角、今日の様に家計上の責任を負つて居ちやどうも困るんだ。』

『其困るのは僕の方が君以上だ、お互いに斯う貧乏して居ちや後顧の憂多々ありだからな。』

『十年前と云ひや大淵は丁度十年前の考へで遣つてゐるが十年後の日本今日の情態は社会が我々志士の活動を許さなくなつたからね。』

『それも意気地のない話しだ、事柄には賛成だが其決行が出来んとあつては我々平生の抱負に背く訳ぢやないか、此は僕と君

との内一人はどうしても犠牲にならねばならんのぢやぞ。』

#### 〔馬賊王〕 第八回

ここには、「志士」の意識で日露戦争後の動乱の満洲を取りまとうとする大淵と、国内にいてその意識を喪失した二人の元志士との落差が顕著に表されている。このような言説は、日本国内を大陸の外部として眼差す視点を喚起するものであり、移民地における読者の意識との重なりが期待されたものと考えることができよう。

このように、日本を発つ前に既に壮士でも志士でもなくなつてしまったことを認識していた川瀬だったが、繰返し述べてきたように、物語の趨勢によつて図らずも馬賊団に入ることになる。次の引用部はそのような川瀬の決意が表された箇所である。

川瀬は其話にて光子の在所を知るを得たり、それと同時に光子が容易ならぬ大罪を犯したるをも知り、其身を省みれば、是れ又国事犯の罪人にして今より何れへか姿を隠さざる可らざるもの、光子とて斯くなる上は日本に連れ帰る能はず、否な二人共既に故郷には帰るを得ざる身の上となれり、然らば此上は大淵の馬賊王を助けて一世の快事に生死を賭するより外に途なし。

#### 〔馬賊王〕 第五十二回

日本に連れ戻そうとしていた光子が悪漢たちを殺害したことを知り、また、自らの武器密輸への関与が露見したことを知った川瀬は、馬賊になる決意を固めるのである。この部分の言説に示されている

ように、川瀬と光子はともに帰属する国家、あるいは「故郷」を喪失することによつて、馬賊になる道を選択するのだ。

一見すると二人の決断は、単に消極的な選択によるものとも考えられるが、必ずしもそうではないだろう。物語に挿入された出来事からすると、彼らは日本から満洲への（移動）を通して、既に「一世の快事に生死を賭する」ような位置に立ち続けていたとみてよい。その意味で、彼らは、日本を出立した時点から（馬賊）の要素を内包した存在として描かれていたと考えるべきであろう。

「馬賊王」において、作中人物たちは、一貫して日本人としてのアイデンティティを保ち続けており、馬賊団に加わつてからもそれが喪われることはない。すなわち、この物語で示されているのは、「日本人」という意識を強く持つ一方で、国家の外部にあつて、自らの内なる（日本）を純化させていく過程でもあるのだ。こうしたナショナリズムの形式は、『大陸日報』の読者にとつて、満洲から北米までの移民地を連続するものとみなす視座によつて認識し得るものとなるであろう。翻つて言えば、そうした位置を象徴するのが、（馬賊）すなわち移民という、国家の枠組みを超越した存在なのである。

#### 4 「馬賊王」からの逸脱

「馬賊王」には、連載終了からおおよそ一年後に連載された続篇がある。<sup>22</sup>その連載第一回に付せられた「緒言」には、「馬賊王」連載終了後、「我邦は朝鮮を併合などして満洲の形勢も多くの変化あり、左

る程に『馬賊王』に現はれたる豪傑の面々も時局の推移と共に其活躍の方面を異にし、其舞台も又従つて変化を来せり」という前提に基づいた物語になることが予告されている。

果たして「馬賊王」続篇は、最終的に大淵が馬賊をやめて、いう物語なのである。前篇で馬賊になった光子と谷川を置いて帰国した大淵と川瀬がともに官憲に逮捕されるところから始まり、馬賊団の敵であった北満馬賊やロシア人、日本から送り込まれた密使との闘争の中で、光子は夫の帰りを待ち続ける。しかし、結局川瀬は満洲に戻るのをやめて日本で暮らすことを決断し、大淵は満洲に戻りはそのものの、官憲の手先のような存在になってしまうのだ。最終場面では窮地に陥つた光子は、清国官兵を率いて突如戻ってきた大淵に救出される。

左にも右にも以前に満洲馬賊の一方に雄を唱へし大淵馬賊王は今や日本に留学せし青年士官と共に馬賊討伐隊の陣頭に立ち、其妻女を救ふ可く来たりしと云へり。

光子も之に対して意外の感なき能はず

『それで貴郎は清国政府に買収されたんですか』

『買収された、ハ、ハ、ハ、買収されたとすれば日本政府の方に買収されたのぢや、何もお前等が今愚図々々云ふ事はない、今から己の行く所に跟いて来れば好い』

〈中略〉

光子は未だ其理由を解せず、半死半生の苦痛に呻吟せる立花毅

造も又其何故たるを知らざるも今現に大淵龍の口より彼等の経緯は日本政府の意向のために一転換を来して満洲馬賊なるものは將に大淵の眼中より逸し去らんとせるものなるを覚らざるにもあらず。

（馬賊王）続篇 第三十二

「緒言」に示されていたように、前篇が終了した一九一〇（明治四三）年六月以後、およそ一年ほどの間に、大日本帝国は韓国を併合（一九一〇・八）し、さらに満洲においても、前年からの日露協約に基づいたロシアとの利益分割交渉がまとまる（一九一〇・七）。本格的な国家単位での大陸進出・侵略が、目に見えるかたちで行われ始めようとしていたのだ。そこにはもはや、国家あるいは日本政府という束縛から離れた「志士浪人」たる馬賊の介入する余地はなくなりつつあったのである。<sup>23</sup> 馬賊王は、内なる外部としての（日本）を抱く象徴的な存在として描き得るものではなくなっていたのである。そうした状況を反映した大淵の変節に対して、光子が失望を感じたかどうかについては不明のまま、物語は幕を閉じることになる。先に確認したように、『大陸日報』読者の意識は、『馬賊』となった移民・光子や谷川らの位置に重ねられたと考えられる。とすれば、前篇で『馬賊』に仮託して構築していたはずの独自のナシヨナリズムは、行き場を喪うことになるであろう。

この物語においては、結果的に国家の枠組に囚われていく馬賊王・大淵よりも、移住先で新たな使命感を持つに至った光子の存在が際立っている。時勢に即して自らの位置に新たな変化をもたらした夫

に対する光子の視線に、違和感を読みとるかどうか。あるいは、カナダから満洲を同一地平で眼差すことを困難と見るかどうか。その選択が読者に委ねられていたとすれば、「馬賊王」続篇の結末からは、労働移民に対する指導的な立場から移民地のナショナリズムを創出しようとしてきた作者の意図と、それを受容する読者の間の意識のせめぎ合いを看取することができるのである。

一九二四（大正一三）年に刊行された、大陸日報社編『加奈陀同胞発展史 第三』には、「日本人と教育」という項目のもと、「日本語学校の沿革」と題してまとめられた記事が掲載されている。この記事には、一九〇六（明治三九）年に開校された晚香坡共立日本国民学校の設立の経緯と、その前年、国民学校設立のための寄付を募る目的で、市内およびBC州在住の日系人に配布されたという、当時のバンクーバー領事であった森川季四郎による「趣意書」の全文が引用されている。

森川の趣意書は「夫れ教育の普及発達と否とは国家の盛衰消長に關するのみならず又以て民人利福の繫る所にして一日の等閑を仮さざるなり」から始まり、移民が増加する中で教育機関が不備であることの問題を説き、「同胞将来の發展に重大なる影響を及ぼす」ものであると述べている。その上で、「此際遍く諸氏の賛同を得て教育勸語の趣旨を奉戴し、本国小学校令の大綱に則り日本人小学校を設立して汎く同胞子女を集め、帝国々民教育の主義に遵い同胞兒女教育の完備を期せんとす」云々と訴えているのである。

既に確認したように、国民学校創設は、排日運動の中での同化志向に対する反発によって企図されたものであった。それはまた、当時の日系ジャーナリズムの傾向とも連動していたのである。この時の森川領事の趣意書は、国民学校創設に係る費用集めという本来の目的を離れたとしても、反同化主義宣言のようなものとして読むことのできるものであろう。

しかし、記事の大部分を占めるその引用の後、一九二四（大正一三）年時点での編纂者は以下のようにまとめている。

之れを今日から見れば實に時代遅れも甚だしいものであるけれども、然しその当時に於ては勿論日本人の發展に何等矛盾する所があつたわけではなく、之れで大体

◇当時の日本人を知る ことが出来るわけである。けれ共この様な趣意が永遠に日本人の間に於て歓迎される筈はなく大正三年堀義貴氏が領事として当市に在任中従来とり來つた日主白從主義の教育方針をすて、

◇白主日從主義を採る 事に改め日本人の子弟をパブリック・スクールに通学せしめ、その余暇をもつて日本語の教育を施す事としたのである（以下略）

（大陸日報社編『加奈陀同胞発展史 第三』 一九二四）

これは、一九〇五（明治三八）年当時の国家意識をその一八年後の時点から振り返ったものである。この歴史的な落差はやむを得ないものといえようが、指導的役割を担った「一時滞在者」Ⅱ（非移

民」層の認識と、その後長く日系コミュニティを形成していった労働移民Ⅱ（移民）層との差異としてみることも可能であろう。すなわち、かつての指導者たちが仕掛けた、ナシヨナリズムの高揚という目論見は必ずしも浸透したとは言えず、むしろ、その枠組みとは別のところで、カナダという移民地の日系コミュニティは独自の展開を果たしたのである。

しかし、本稿で問題にしたかったことは、そのような歴史的落差によって証明されるレベルには留まらない。むしろ、本国と移民地の間に切断が入れられようとした時期に、新たに創出されようとしたナシヨナリズムが、（物語）という形式を採って行われようとした、その様態を見ようとする試みだったのである。

カナダで満洲馬賊小説を読むということ。その時、北米の移民地が、帝国の中国大陸における植民地政策に、極めてフィクショナルなかたちで接続されようとしていた。そこで与えられた「国民の大陸的発展」といった虚構がどのように読まれようとしたか。その有り様を考える時、移民地における、もうひとつの〈近代日本〉創出の戦略過程と、そこに移民たちが関わり、やがて逸脱していく様を認めることができるのである。

## 注

① 新保満・田村紀雄「戦前カナダの日系紙」（『東京経大学会誌』一九八三・一一、一九八四・三）によると、創刊当初の発行部数は三〇〇部、

最終的には四〇〇部ほどになったという。なお、『大陸日報』は、創刊当初の約半年分が失われているものの、一九〇八（明治四一）年以降のほとんどがブリティッシュ・コロンビア大学に所蔵されており、現在は、マイクロフィルムで読むことができる。

② カナダ移民史の研究については枚挙にいとまがないが、特に本稿で参照したものに、飯野正子『日系カナダ人の歴史』（東京大学出版会、一九九七）、佐々木敏二『日本人カナダ移民史』（不二出版、一九九九、田村紀雄『カナダに漂着した日本人』（芙蓉書房、二〇〇二）などがある。

③ 新保・田村前掲論文（一）の他、新保満・田村紀雄・白水繁彦『カナダの日本語新聞―民族移動の社会史』（PMC出版、一九九二）など。

④ 最初のナタール法が可決された一九〇〇（明治三三）年から三年間、日本政府はカナダ移民への旅券発行を停止した。

⑤ 初代牧師は、のちに『加奈太新報』を設立する鍋木五郎である。

⑥ 新保・田村・白水前掲書（三）

⑦ 一九〇三（明治三六）年創刊、一九〇四（明治三七）年三月一日より日刊化した。

⑧ 一九一九（大正八）年、晚香坡日本共立語学校と改称される。

⑨ 当初の四〇〇名という制限も一九二一（大正一〇）年には一五〇名（妻子は除外）に制限され、さらに一九二八（昭和三）年には妻子も含む絶対数が一五〇名に制限される。

⑩ レミュー協定締結以降、日本からの移住者は微増していくに過ぎない。それでも、二世人口を含むことで日米開戦時のカナダ国内の日系人はおよそ二三〇〇名ほどに達するが、同時期の満洲やブラジルの移民人口と較べると決して多数とは言えない。

⑪ 創刊後、約半年で経営に行き詰まったため、実業家の山崎寧が記者の大浜金次と組んで買収、一九〇八（明治四一）年三月には山崎が単独で社主となった。

⑫ 明星派の歌人・石上露子の恋人として知られる。東京高等商専を中退

し、カナダに渡る。『加奈太新報』を経て、『大陸日報』の記者となった。  
⑬ 一九一〇（明治四三）年に大陸日報社より刊行。

⑭ 朝鮮に赴き、当地で『朝鮮統治論』（一九二〇）などを著した。

⑮ 黒龍会編『東亜先覚志士紀伝』（一九三六）下巻の「列伝」の部に「上田黒潮」の項がある。長く黒龍会と関わっていたことが記され、さらに、一九二七（大正一六）年に内田良平と贈答した和歌が掲載されている。

⑯ 浪客の署名で、『大陸日報』一九一〇・三・二九～四・一二に掲載。

⑰ 『黒潮日記』（一）（『大陸日報』一九一〇・三・三〇）

⑱ 例えば、帝国領事であった五明砂講述「法制上に於ける在加法人の地位」（大陸日報社編『加奈陀同胞発展史 第三』（一九二四）の「移民・非移民の区別」の項には、「本来の非移民たる一時的滞在者の例」として外交官・宗教家、大学教授などと並んで新聞記者も挙げられている。

⑲ バンクーバーで田村商会を起こした実業家。後に貴族院議員になった。

⑳ 『黒潮日記』（四）（『大陸日報』一九一〇・四・一）

㉑ 『大陸日報』にクラブピアが日常的に掲載されるようになるのは第一次大戦時の時局写真以降のことであり、やがてファッションを扱った記事などにも使用されるようになるが、初期の紙面で断続的に写真が掲載されるのは極めて異例のことだった。

㉒ 『志士活躍 馬賊王』（『大陸日報』一九一一・五・一七～六・二三）、全三一回。

㉓ 実際、この時期を境に馬賊自体の意味も変わり、やがて「抗日」を目的とした集団になっていく。渡辺龍策『馬賊社会史』（秀英書房、一九八二）、渋谷由里『馬賊で見る「満洲」——張作霖のあゆんだ道』（講談社、二〇〇四）などを参照。

究代表者（日高佳紀）の研究成果の一部である。なお、本文中の引用は、特殊なものを除いてルビを省略し、旧字は新字に改めた。傍線は全て引用者による。

（本学准教授）

〔付記〕 本稿は、科学研究費補助金 萌芽研究「戦前期における日系カナダ移民の日本語文学環境の調査研究」（課題番号 19652109）研